

## おばあちゃんの土曜日

江口 遼太郎

「いらっしやい。土曜日だよ。」

祖母の元気な声が聞こえてきた。祖母は、毎週土曜日の十三時から、町内の公民館で土曜市を開いている。近所の方々と一緒に、家庭で育てた野菜やくだもの、手作りの漬け物などを売っている。夏になると、夏野菜のカボチャやナス、スイカやブルーベリーなどを売っている。全部祖母が育てたものだ。

「遼太郎君、来てくれたのね。好きなものがあつたら買つてね。」

近所の方が声をかけてくれた。百円や二百円のものが多く、ほくでも買える値段でとてもおどろいた。ほくは、ブルーベリーを買った。袋いっぱい入っていたのに、二百円だった。家に帰ってからゆっくり食べようと思つたが、がまんできなくてその場で食べた。口の中いっぱい甘さが広がり、とてもおいしかった。土曜日には、町内の方々がたくさん来ていた。みんな楽しそうにお話をしていて、祭りのような明るい土曜日だと感じた。

土曜日が終わって、ほくは祖母の片付けを手伝った。売上げの計算を手伝っていると、祖母が

「売上げの二十パーセントは、土曜市で品物を売っているみんなが貯金をしているんだよ。」

と教えてくれた。ほくはとてもおどろいた。「どうしてなの。」

と質問をしてみた。すると、祖母は笑顔で、

「貯金をしたお金は、町内会のもちつきやレクリエーションなどをするときを使うの。町内会のイベントにみんなを無料で招待できるようにしているんだよ。もちろん子供たちにも楽しんでもらえるようにね。」

と教えてくれた。ほくは、それを聞いてすごいと思った。祖母たちがいつもふるまってくれていた町内会行事の食事などは、土曜日で働いて貯金をしてくれていたことを初めて知つた。本当に感謝の気持ちでいっぱいになった。

「いつもありがとう。おばあちゃん。」

ほくはうれしくて、思わず感謝の言葉が出た。

その日の夜、土曜市のことを母に伝えた。母は知っている様子だったが、ほくの話を最後まで聞いてくれた。

「次の行事には、感謝をして行こうね。遼太郎たち子供が喜んで参加することが、恩返しになるんだよ。」

と母は言った。ほくは今まで、町内会で出される食事や景品が、どのように準備されているかなど考えたこともなかった。一つ一つの活動は、祖母たち町内会の方々の思いやりの気持ちで運営されていることを知つた。ほくはこれから、様々な地域の行事には、感謝の気持ちを忘れずに参加したい。そして、ほくもいつか、だれかのために働ける人になりたいと思つた。